

●優秀賞

地域へ働きかける平和教育

～「二十世紀からの贈り物」～

愛知県碧南市立棚尾小学校
(前・愛知県安城市立志貴小学校) **かねこ 金子てるこ**



〈概要〉

戦後 65 年を迎え、子どもも保護者も教師も戦争を全く知らない、あるいは探求しない世代となった。戦争を知らない世代が続くのは素晴らしいことだが、世界の諸処ではそうではない。そこで、今こそ小学校における平和教育の在り方を再考する必要があると考えた。

折しも戦時中に旧日本軍の落下傘部隊が使用した絹製の一式落下傘が志貴小学校の郷土史料室の戸袋から見つかった。これを奇貨として、児童・教師が遺物収集・調査解明、そしてコンピュータを活用して調査結果を編集する学習プログラムを構築し、平和学習に真正面から取り組んだ。

一連の実践では、児童の探求心・追求力・発信力を培った。また、日露戦争遺物、太平洋戦争遺物及び軍の検閲のない戦時写真 1055 枚を発掘解明していったことで、地域社会を巻き込みながら、児童は身近なこととして日本の戦争を学び、平和について深く考え、平和の尊さを語り継ぐ姿に成長した。

1 主題設定の理由

2010 年、戦後 65 年を迎え、子どもも保護者も教師も戦争を全く知らない、あるいは探求しない世代となった。戦争を知らない世代が続くのは素晴らしいことだが、世界の諸処ではそう

ではない。こういう状況を鑑みるとき、小学校における平和教育の在り方を再考する必要があると考えた。

折しも戦時中に旧日本軍の落下傘部隊が使用した絹製の一式落下傘が志貴小学校の郷土史料室の戸袋から見つかった。新聞記事(平成 21 年 7 月 23 日中日新聞社会面)にあるように太平洋戦争を探求し平和を考える契機となり得る稀少な史料である。また、本学区は「日本のデンマーク」と呼ばれていた農業中心の地域であり、コミュニティとして十分機能している。地域の特徴を考慮し、本校の史料室から発見された旧日本軍落下傘を契機にして、地域ぐるみで、戦争について知り、平和について考え、平和の尊さを語り継ぐ子どもを育てたいと考え、本主題を設定した。



●中日新聞(平成 21 年 7 月 23 日)

2 研究の方法

● 研究の仮説と手立て

戦争について知り、平和について考え、平和の尊さを語り継ぐ子どもを育成するために、次のような研究仮説と手立てを考え取り組むこととした。

仮説 6年生の総合的な学習の時間に平和学習「二十世紀からの贈り物」を設定し、戦争史料について調べ、コンピュータを使ってその調査結果をまとめていく学習を展開することで、身近に戦争を捉え平和について考え、平和の尊さを語り継ぐ子が育つであろう。

手立て① 児童に興味関心をもたせるため、学区に残された戦争遺物を発掘していく。

手立て② コンピュータを使って、戦争遺物調査結果をまとめる発信力を育む。

手立て③ 地域へ協力を求め、地域と一体となって社会へ平和の尊さを語り継ぐ地域ぐるみの活動へ発展させる。

3 研究計画

(1) 平和学習単元の設定

平和学習単元「二十世紀からの贈り物」(資料1)を設定し、校長自らが担任とチームティーチングで授業実践を進め、リーダーシップを発揮し地域へ働きかけ、戦争遺物を掘り起こすことにより子どもの探究心を育成する。

目 標

- ・ 地域の実物史料について追究し、戦争について身近な出来事であることを学ぶ。
- ・ 平和の尊さについて考え、戦争遺物から学んだことを語り継ぐ。

段階	テーマ・時数	学習内容
戦争を知る段階	<ul style="list-style-type: none"> ○旧日本軍一式「落下傘」発見 ○「落下傘」の解明をしよう グループ学習 個人追求 夏休みの学習〈2〉 →手立て① 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 落下傘を実際に見て触れる。 ◎ 落下傘の大きさ・重さ・使い方・関係者など謎の解明をする。 ◎ 志貴小学校に寄贈されたいきさつを知る。 ◎ 日本に残っている落下傘を調べる。 ◎ 落下傘の製図を作成する。
平和について考える段階	<ul style="list-style-type: none"> ○戦争史料を収集しよう〈2〉 →手立て①、③ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎積極的に戦争遺物を収集し、調査する。 ◎地域を対象に、広く実物史料の収集をする。
	<ul style="list-style-type: none"> ○戦争史料について詳しく調べよう〈2〉 ○戦争史料の調査からわかったことや考えたことを話し合おう〈1〉 ○平和について考えよう〈1〉 	<ul style="list-style-type: none"> ◎実物史料について、専門の先生や資料から詳しく調べる。
平和の尊さを語り継ぐ段階	<ul style="list-style-type: none"> ○戦争史料の調査をまとめよう。〈10〉 ○平和の尊さを伝えよう〈2〉 →手立て②、③ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎実物史料について、調べたことを発表する。 ◎戦争の悲惨さや平和の尊さについて考え、話し合う。 ◎実物史料について、調べたことをまとめる。戦争の悲惨さや平和の尊さについてまとめる。「二十世紀からのメッセージ」を配布する。 ◎情報発信に対する周囲の反応をもとに、平和の尊さを社会に語り継ぐ。

●資料1 / 総合的な学習の時間 平和学習単元構想「二十世紀からの贈り物」20時間完了

(2) 検証方法

- ① 児童観察・ノートの記録・アンケートにより、児童の変容を分析する。
- ② メディアの報道内容から、本実践について分析する。

4 研究実践内容

(1) 戦争を知る段階～一式落下傘の解明～

- ① 一式落下傘の調査—大きさ・作り方を調べて製図を作成



6年生の児童は体育館に一式落下傘を広げ大きさや重さを測った(上写真)。広げた大きさは半径5.6m、重さは3.65kgであった。大きさと軽さに児童たちは驚いた。次に各箇所を写真に収めた。また、この記録をもとに児童Aが中心となって落下傘の図面や調査結果を仕上げた。名古屋テレビ・NHKテレビ・テレビ愛知、中日新聞・読売新聞・毎日新聞・時事通信・安城ホー

校内の郷土資料室から発見→全容解明



●中日新聞 (平成 21 年 8 月 12 日)

ムニュースがこの模様取材し、ニュースで報道した。さらに児童Aは8月19日、一式落下傘の調査のため、東京の靖国神社遊就館の白石博司氏を訪ね、当時の落下傘に関わる日本軍極秘文章のコピー、図面を手に入れてきた。その図面は、児童が作成した図面とほぼ同じだった。

② なぜ志貴小学校に落下傘があったのか

児童たちは地域の人々に聞き取り調査をし、落下傘部隊に所属していた尾崎町に住んでいた鈴木博夫さんが持ち帰った物であることをレポート(資料2)のように追究した。しかし、携行袋に書かれている「天雷特攻隊」の意味はわからなかった。

鈴木博夫さんが昭和16年に千葉習志野陸軍航空隊に入隊し、落下傘部隊所属となった。部隊では、落下傘がうまく開かなかったり、落下傘の紐が体に引っ掛かって開かなかったりで落下死亡事故は絶えなかった。その後、博夫さんは宮崎県に移動し出陣の予定となったが、落下傘演習で大きな怪我をして一時期軍事病院に入院した。この時、子どもだった従妹の鈴木真智子さんが母親と見舞いに行った。直後、終戦となり落下傘2本を持ち帰り、1本を小学校へ寄贈した。本人は平成13年に80歳で亡くなった。

●資料2

③ 天雷特攻隊とは

靖国神社遊就館の白石博司さんから10月に児童Aに手紙が届いた。児童Aの熱心な調査ぶりを賞賛するとともに「天雷特攻隊」の資料が添付されていた。

手紙文より

戦争末期の昭和二十年六月末に海軍計画の対サイパン作戦「剣作戦」が敵の空襲により予定飛行機の大半を撃破され実行できませんでした。

そこで、8月下旬に「陸軍空挺部隊園田直大尉以下約三百名」を加えて実行することとなり、「天雷特攻作戦」と命名して準備しているうちに終戦となった「未発の特攻作戦」です。落下傘を寄贈された方は、この園田空挺部の隊員であったと考えられます。



(2) 平和について考える段階

① 日露戦争資料発掘

落下傘の調査を進めていると、児童Bが日露戦争中に陸軍二等看護長だった小森政治さん（三重県三重郡出身）が当時の清国で病死（戦死）した時の多数の資料をもってきた。小森政治さんは児童Bの親戚に当たる方で、遺族が三重県にある200年続いた蔵内を整理して、そこにあった遺物を学習に生かしてほしいと提供し



たものである（左下 平成21年12月9日毎日新聞）。早速子どもたちは史料を一つずつ丁寧に調べ、デジタルカメラに収め、コンピュータを駆使してまとめていった。そして調べた結果を発表し合った（上写真・下授業記録）。

●毎日新聞（平成21年12月9日）

児童D：銀でできたバッチを調査した。命と引き換えに銀はいをもらっても家族はうれしくないと思う。

児童E：明治37、38年日露戦役従軍と彫られた赤十字社のメダルです。赤十字社から送られた物。これも銀でできています。家族は105年たった今も悲惨な気持ちで、これを見るたびに戦いに行った親戚のことを思っている。戦死してから子どもが生まれたと遺族から聞きました。どんなに悲しいことか思っただけでも辛いことだ。

児童B：満州軍総司令官大山巖からの贈呈品。日露戦争はよそのことのように思っていたけど、実際に見ると実感がわいた。100年たってもこんなに多くの物がこんなに大切にされている。



この調査と話し合いから児童は戦後100年経っても家族の平和は崩れたままであり、心の平和はないことを考えさせられた。

② 検閲されていない戦時写真 1055 枚を発掘

12月になって、学区に住む中根さんから平和学習に役立ててほしいとアルバム7冊に整理された594枚と未整理の461枚、計1055枚の戦時中写真が学校へ寄贈された。

軍の検閲を受けていない写真は平和を考える最善の史料と考えた。児童に感心のある写真を

選択させて、アルバムにあるタイトルを抜書きさせた。そして、インターネットで調べさせ、自分の考えをコメントさせる形でコンピュータ



			
昭和7年4月日露戦争地を「妙高」で巡洋した時、大連で寄港し女子学生を招待した。	昭和8年4月10日満州国建設直後のハルビン駅ヨーロッパ風の建物。にぎやかではない。	溥義がハルビン駅前に掲げた執政宣言。	臨時海軍防備隊特設砲艦「広寧」。アムール河を日本が防備していた。
			
ハルビンにある臨時海軍防備隊兵舎。新京に本部があったとされる。	旧満州国のケシ畑。旧満州国の重要な収入源であり、ケシから採集されるアヘンは軍人の麻酔としても多く使用された。	「匪賊」、匪賊ってなんだろう。アルバムには写真はないが「さらし首」というタイトルが3個ある。	匪賊狩りから得た戦利品。大きさが分からない。これで戦うのは無理。
			
満州鉄道のハルビン鉄橋工事場を撮った。爆破事件で問題になった満州鉄道。大きくて広い。	上海特別陸戦隊の市街戦状況。戦争しているところを写真に撮るのは難しい。	上海事変当時に活躍したタンク。ねじがよく外れて壊れたという。	兵士がこの中に入って射撃するトーチカ。
			
上海市政府の建物戦争のため壊れた砲弾の跡がたくさんある。	爆弾三勇士の墓標爆弾を抱えて南京に攻め入った兵士の墓。	占領した建物に立て札を立てていたことが分かる。家屋占領部隊・日時、戦死者負傷者の氏名が記されている。	人気歌手小唄「勝太郎」さんが上海で旧日本軍兵士とツーショット。

を使ってまとめさせた。

まとまりのある写真で日本の史実を秘めていると思われたので、軍事評論家ハルビン社会科学院名誉研究員辻田文雄氏に鑑定を依頼した。

この写真の調査については、鑑定の結果を踏まえ、次の新聞記事のように報道された。

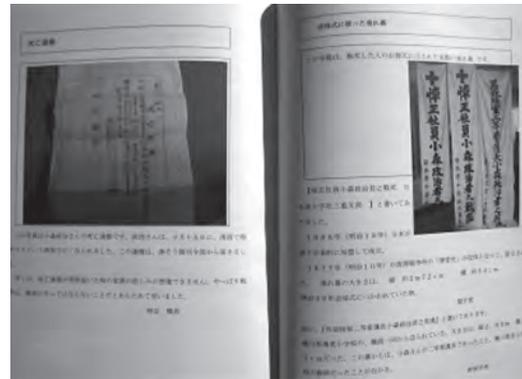


●中日新聞 特報 全版 (平成 22 年 1 月 26 日)

児童も教員も保護者・地域・社会もこの大きな報道に驚いた。改めて遺物の語る知られざる日本の戦争と平和の重みを考えさせられた。

(3) 平和の尊さを語り継ぐ段階―「二十世紀からのメッセージ」の完成・発刊

戦争遺物調査結果や平和についての考えを記述した児童のレポートを学習成果として編集した(写真)。平成 22 年 1 月 28 日、A 4 版 70 ページにわたるカラー仕上げ『二十世紀からのメッセージ』が完成した。9 月から 5 ヶ月間にわたり小学 6 年生がコンピュータを使ってまとめ作り上げた意義は大きい。「二十世紀からのメッセージ」と題した 75 点の初公開遺物調査と延べ 31 人の戦争体験から得た平和の尊さをまとめた大作となった。



学 習 前	学 習 後
戦争を体験してみたい	戦争の実物について調べたり体験した人に話を聞いたり、最初は戦争史料がこんなに多く残っているなんてすごいと思った。でも調べていくうちに一つ一つの悲しさが伝わってきて自分も悲しくなった。みんなで話し合う勉強で、いろいろ考えてどんどん戦争の罪がわかっていった。戦争は人の心や命をめちゃくちゃにする。世界中で平和条約をつくってどの国も戦争をやめさせたい。
戦争はカッコいい	体験談を聞いて涙が出てきた。身近に多くの人があっという間に亡くなったことがわかった。戦争はやってはいけないことだとわかった。
戦争をしてもよい	戦争の史料を調べて戦争の残酷さがわかった。多くの史料が出てきたのも驚いた。罪のない人が殺される戦争は、絶対反対する。
戦争は自分に関係ない	社会科の教科書で勉強したときは外国のこのように思ったけれど、実物史料で勉強して本当の出来事と実感した。食べ物も服も勉強も心も命もなくなるのが戦争。平和な日本をつくっていきたい。

5 研究の考察と成果

● 仮説の検証

① 児童のノート・レポートの記述、観察からの考察

児童一人一人の学びについて、ノートから学習前と学習後にまとめた。

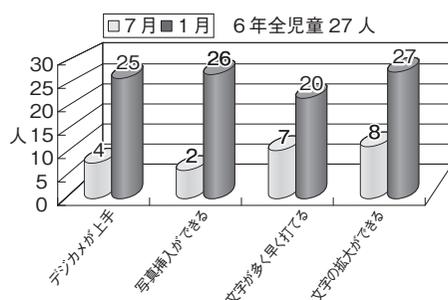
どの児童も戦時についてよく調べ、よく考えた平和の大切さを認識した姿がうかがわれる。

児童Aは靖国神社遊就館を訪ね、落下傘について質の高い調査をした。また、レポートに次のように平和について考えを記している。

戦争は昔のことだから考えなくていいと思っていたが、インドネシアパレンバンにあった世界最大級の製油基地を奇襲占領した落下傘部隊に鈴木さんがいたとは驚いた。たくさんの人の命がなくなった大変な戦争に行き、大きな怪我をした。生きて落下傘をもち帰り僕たちに残し、平和の大切さを残したかったのだと思う。

わからないことを一つ調べると二つわかり、一人に聞くと二人が話してくれた。多くの人が協力をしてくれて、調べる楽しさを体験した。

学習後の全児童のまとめや児童Aの記述・行動から平和学習「二十世紀からの贈り物」を設定し、学区に残された戦争遺物を発掘し実物史料を調べたことで様々な驚きを誘発したといえる。それを契機として戦争について考え発表し合うことで、日常生活レベルで戦争を捉え平和



●資料3 / コンピューターを使った表現力について

の尊さについて深く考えるようになっていった。

② コンピューターの活用アンケートから考察する

コンピュータを使って調査結果をまとめることについてアンケートした(資料3)。学習前の7月と比べ1月におけるコンピュータ活用について、「デジカメ写真が上手に取れる」「写真挿入ができる」「文字が多く早く打てる」「文字の拡大ができる」といった技能の向上に自信をもった児童が激増したことがわかる。これは、自分たちの学びを積み重ねコンピュータ技術でより鮮明にはっきりとまとめることができ、児童の納得のいくレポートになっていった成果を示している。また、実物史料をデジカメで視点を絞って捉え、コンピュータを駆使して「二十世紀からのメッセージ」を完成させることにより児童の表現力が育成され、遠い過去だった戦争をありありと伝播し活字で平和の大切さを語り継ぐことができた。

③ メディアの報道内容からの考察

本実践について、メディアによる報道は新聞記事13回(社会面・全面特集を含む)、TV6回に及んだ。新聞社の取材に応じた児童Aは「戦争を身近に感じ平和の大切さがわかった。落下傘についていろいろな人に知ってもらいたい。」と答えた。全児童がメディアに平和の大切さを自分の言葉で語り継いだ。

新聞記事は「戦争を実感 資料470点・・・相次ぐ寄贈の背景には住民と学校のつながりの強さが感じられる」と地域へ働きかける平和教育の重要性を語る。

これら夥しい寄贈は学校が家庭・地域ばかりでなく社会へ働きかけた連携の賜物といえる。その結果多くの反響をいただいた実践であり、児童・保護者だけに終わらず地域や遊就館・日本赤十字社・大学といった社会を巻き込んだ小学校における斬新的な平和教育となった。

手立て①②③により、仮説の検証ができたといえよう。

